

スマトラ島沖地震による津波被害調査と海岸防災の推進



インドネシア、アチェでの住民への聞き取り調査中の柴山教授(中央)と佐々木淳助教授(左、背面)

2004年12月26日インドネシア、スマトラ島東部沖でマグニチュード9.0の大地震が発生し、それに伴う津波によりインドネシアやスリランカ、インドなど12カ国で死者と行方不明者は約31万人を超え、東南アジアおよび南アジア地域を中心に未曾有の大災害を引き起こしました。

工学研究院では、柴山知也教授を隊長、佐々木淳助教授、鈴木崇之非常勤教員(助手相当)らを隊員する横浜国立大学隊を1月9日からスリランカ南部、2月11日からスマトラ島北端、バンダアチェ付近に派遣し、調査を行いました。特にインドネシアでは48.9mという今回の津波での最大の津波痕跡高を計測しました。この記録は、地震直後に、確かな証拠とともに計測された記録としては世界最高記録です。

インドネシアでは地元アチェにあるシアクアラ大学のマシミン講師が、スリランカでは南部ゴールにあるルフナ大学のニマル上級講師とモラトワにあるランカ水理研究所のジャヤラトネ研究員が調査の全過程に参加してくれました。彼らはいずれも土木工学を専攻する研究室の元留学生達で、スリランカの2人は横浜国立大学の博士課程後期を卒業して博士の学位を得ています。

この調査結果を受けて、日本学術振興会のアジアアフリカ学術研究基盤形成事業に横浜国大が選定され、柴山教授がコーディネータを務める津波・高潮防災のプロジェクトを2005年から3年間行うことになりました。タイ、ベトナム、インドネシア、カナダ、イランなどの大学に勤務している横浜国大留学卒業生たちとの協働により、この津波・高潮防災プロジェクトを進めていくこととなります。